

平成24年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成24年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 キチジ

学名 *Sebastolobus macrochir*

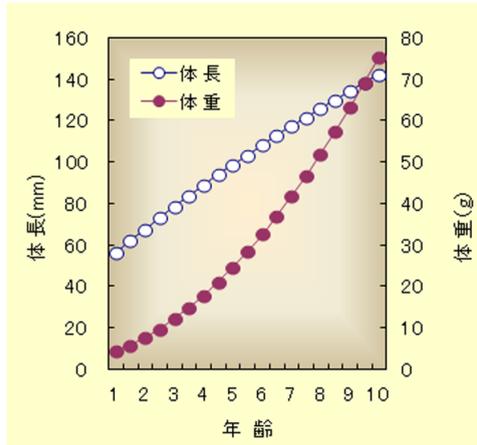
系群名 太平洋北部

担当水研 東北区水産研究所



生物学的特性

寿命: 20歳程度
成熟開始年齢: 雄5歳(100%)、雌10歳(11%)、11歳(35%)、12歳(69%)
産卵期・産卵場: 1~4月、分布域全域
索餌期・索餌場: 周年、水深350~1,300mの深海域
食性: エビ類、オキアミ類、クモヒトデ類、端脚類、多毛類、魚類
捕食者: マダラ、アブラガレイ

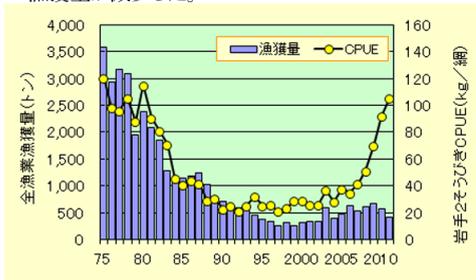


漁業の特徴

太平洋北部では、キチジは主に沖合底びき網漁業(沖底)で漁獲されるほか、小型底びき網漁業、底延縄、底刺網でも漁獲される。近年、沖底船は9~12月にスルメイカを狙って操業することが多く、スルメイカより深場に生息するキチジに対する漁獲圧は以前より弱くなっていると考えられる。

漁獲の動向

全漁業種類による漁獲量は1975~1997年にかけて減少した。沖底の漁獲量も1970年代には2,000トン前後と多かったが、1997年には過去最低の229トンとなった。その後、沖底の漁獲量は増加し、2003年以降は500トン前後で推移している。しかし、2011年には全漁業種合計で417トン、沖底で390トンとなり(暫定値)、東日本大震災の影響により漁獲量が減少した。



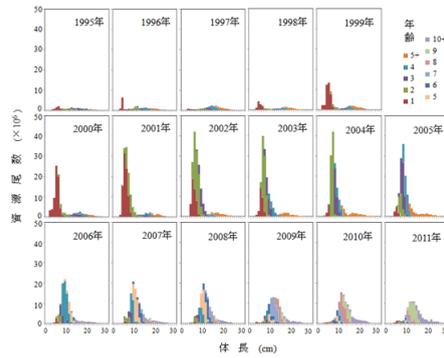
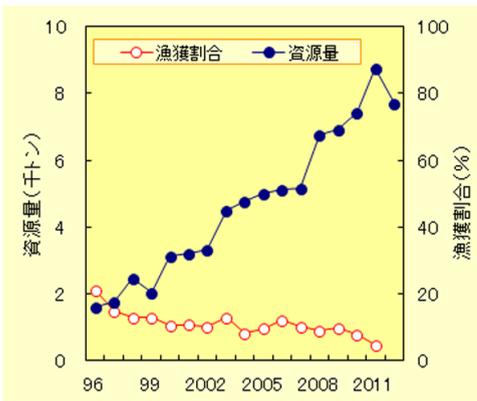
資源評価法

秋季にトロール網による底魚類資源量調査を実施し(水深150~900m、計124地点)、面積-密度法により資源量を推定した。調査海域は青森~茨城県沖で、太平洋北部のキチジの分布範囲をカバーしている。本調査で用いたトロール網の身網による採集効率(網の前にいた魚が網に入る比率を示す係数)にLogistic式を仮定し、この値を用いて資源量の計算を行った。

資源状態

2011年の尻屋崎~岩手海区(青森~岩手県沖)のかけ廻しによるCPUEは中位水準、岩手海区の2そう曳きによるCPUEは高位水準となった。一方、2006年以降、金華山海区以南(宮城県以南)のトロールによるCPUEは中位水準にまで回復していたが、2011年には急激に上昇して高位水準となった。しかし、金華山海区以南では震災により漁業の操業実態が変化した可能性が高い。CPUEの動向に加え、資源量推定値が過去5年では増加傾向にあること、2011年に中位水準と判断した資源量が2012年にはやや減少した。資源水準は中位水準、資源の動向は増加傾向と判断される。





トロール調査の面積-密度法 (Logistic式による採集効率を採用) から得られた体長組成の推移を示す。

管理方策

2000年代の資源量には増加傾向が認められるが、これは1999～2002年級群の高いRPSによる加入量の増加によるものである。キチジの資源は中位水準にまで回復したと判断されるが、2005年以降の資源尾数には減少傾向が認められる。今後、悪い加入が続く可能性を考慮し、漁獲を抑えることで親魚量の増加を図ることを資源管理目標とした。キチジは成長が遅く、成熟年齢が比較的高齢であることを考慮して管理基準値にF40%SPRを採用し、この時の漁獲量をABClimitとして算出した。

	2013年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	440トン	F40%SPR	0.06	5.4%
ABCtarget	350トン	0.8F40%SPR	0.05	4.3%

- ABCは10トン未満を四捨五入した値

資源評価のまとめ

- キチジの資源は中位水準にまで回復し、増加傾向が認められる
- 2005年以降の資源尾数には減少傾向が認められる
- 今後、悪い加入が続く可能性がある

管理方策のまとめ

- 漁獲を抑えることにより、当面の親魚の増加を図る
- 単価が安い小型魚の漁獲を控えれば、親魚量が増加し、その後の加入量の増加も期待できる
- 漁獲開始年齢の引き上げは、キチジの資源管理に有効な方策と考えられる

執筆者: 服部 努・伊藤正木・成松庸二・稲川 亮

資源評価は毎年更新されます。